

## 「地上の星」は今どこにあるのだろう

あの番組が帰ってきました。

この4月6日から、NHKで「新・プロジェクトX」という番組がスタートしました。タイトルにあるように、以前放映されていた「プロジェクトX」という番組の新シリーズです。

2000(平成14)年3月末から2005(平成19)年にかけて約5年間放映された前シリーズを、とても興味深く毎週楽しみに視聴していました。中島みゆきの主題歌「地上の星」や田口トモロヲの独特なナレーションも相まって、高視聴率を誇る人気番組でした。前シリーズ同様、今シリーズの主題歌もナレーターも変わらず、昭和世代には懐かしい番組の復活を、個人的にとっても嬉しく感じています。

この番組は、無名の人々の知られざる活躍を描いたドキュメンタリー番組です。斬新な演出手法など、その後のテレビのドキュメンタリー番組の礎となった番組としても評価が高く、視聴者に好評だったのは、それまでのドキュメンタリー番組と言えは有名人や偉人を取り上げたものが多かった中で、陽の当たらずとも各方面で活躍した人や組織を拾い上げて光を当て、感動秘話や知られざるエピソードを取り上げた内容が、多くの人々から受け入れられたからです。

私も常日頃から、学校生活の中で、特に目立ちはしないながらも、委員会や清掃や奉仕活動に地道に黙々と取り組んでいる生徒を高く評価しようとすることに重きを置いてきた(本校長だより No. 50 『ひまわり』よりも『たんぽぽ』が好き!)参照)ので、この番組には深く共感したのです。

折しも、前シリーズがスタートした2000年は、「ゆとり教育」の号令のもと、新学習指導要領の改訂で、学校教育に「総合的な学習の時間」が創設された時期でした。「総合的な学習」って何?何をやればいいのか?と、当時の現場の先生方にとってはかなり混乱と試行錯誤の連続だったのです。

そこで、自分の学年の総合的な学習の時間では、この「プロジェクトX」を録画したりビデオ化されたものを購入して、教材として有効活用したものです。また、担当した生徒会で、生徒会スローガ

ンを「プロジェクトS」と銘打って各種学校行事を大いに盛り上げたり、文化祭のステージ発表で、「地上の星」を熱唱した懐かしい思い出もあります。

そんな当時世間の耳目を集めていた超人気番組だからこそ、反面、多くの場面でパロディの対象になったり、行き過ぎた取材や事実誤認の内容が関係者からクレームを受けたりすることも少なからずありました。

その中で私が一番覚えているのは、大阪府の淀川工業高校を番組で採り上げた「ファイト！町向上に捧げる日本一の歌」という回の放送です。

「淀川工業高校は、その地域では荒れている学校として評判が悪く、音楽など全く縁がなかった高校だったが、新任の先生が周囲の反対を押し切って男声合唱部を設立し、合唱を通じて生徒を更生させ合唱コンクールに出場した。荒れた学校の出場に、コンクール会場にはパトカーが見回りをし、この学校の参加に主催者側も大きな警戒感を抱いていた」という放送内容でした。しかし、事実は違ったのです。

実際には、「当時の学校は荒れてもいなかったし、前々から全国大会出場レベルの吹奏楽部があって、男声合唱部設立も早くから校長は賛同していた。合唱コンクール時も、主催者側は数ある参加校の一つとしてしか捉えておらず、パトカーなど来てはいなかった」のです。

テレビやマスコミは、往々にして、視聴率や購読数当てに、このような事実誤認や行き過ぎた演出に陥ります。猛省してもらいたいものです。当事者に対して甚だ侮辱的で失礼極まりなく、名誉を傷つける所業です。

そもそも、“荒れた”学校という表現自体どういうつもりなのでしょう。一般的には、他の生徒や、学校、地域への多大なる迷惑行為・触法行為などの目立った問題行動をする生徒が一人でもいれば、あるいは集団全体の傾向・雰囲気として極端にモラルが低い、ということ周囲が認知するところになれば、“荒れた”学校というレッテルを貼られることになるのでしょうか。

私も、かつて何度も生徒指導困難校に勤務した経験があります。当時、変形服を着る生徒、喫煙を繰り返す生徒、器物損壊や暴力をふるう生徒とも真剣に向き合ってきました。確かに、周囲からは“荒れた”学校と噂されてもいました。毎日毎日それはそれはたいへん

な日々でしたが、そんな子どもたちも、はじめから悪くならうと思って悪くなった生徒は一人もいません。今では成人して幸せな家庭を築いて、今でも付き合いのある人間がほとんどです。

ただ、当時、そういった一部の生徒の表面上の素行だけが興味本位でクローズアップされ、確かに学校が周囲からいい印象を抱かれていない現実には、まじめに一生懸命頑張っている生徒や、学校を良くしようと必死に頑張る自分を含む先生方のことを思うと、心が痛む切ない思いをしたのは事実です。

私は、新年度早々、この新津二中を、市内で一番、日本で一番の中学校にしたいと生徒に言いました。しかし、それは、すべての子が外目から見て品行方正であればいいということではありません。いろいろな生徒がいますし、学校は生き物ですし、いろいろな問題も当然起こります。

周囲の評価や評判や噂話の類など気にすることなどありません。周囲におもねる必要もありません。内部の人間にしかわからないことはたくさんあるのです。よくわかってもない外野の人間が、あれこれ興味本位で噂することに惑わされる必要はありません。何もわからない不確かな情報をもとにしての、言いたい人間には言わせておけばいいのです。我々保護者や教職員の最大の評価者は、今我々と向き合っている目の前の子どもたちです。

常に足元を固めましょう。一人でも多くの「地上の星」を見出してください。一人でも多くの子どもたちに光を当ててください。

高い空からツバメに教えてもらわずとも、日本一の学校をめざすためにその最大の役割を担うのは、教師・保護者・地域の我々大人なのです。